夜灯祭り

村上　雅子

青柿やどの夕暮れを歩こうか

夜灯祭り終りいい手をしているね

雉子を見た少年は天竺木綿

大欅蝶のねむりの中にある

椿より遠く離れて髪を切る

青栗の下の一揆に加わりぬ

夕蟬になるまで母は布洗う

花こぶし脱ぎすてている地球かな

私より日焼けしている父の遺書

被爆図の中で鶏飼っている

夕焼けの壁にその後の海を描く

麦飯を食べて地球の薄ぐもり

いつぽんの紐ではこわい濃あじさい

力みんなあげるよ冬の影法師

冬の来る田んぼは甘い力です

鐘が鳴る一里四方に黴咲いて

晩鐘へまぎれこみたる白き桃

外套の中の水平線に逢う

桃の日へ流れて行つた二等兵

墓洗う男の中の嵐かな

受賞のことば

七月四日、この日は、東京では加藤楸邨先生の葬儀が行なわれていましたが、その同じ時間に私は思いがけなくいただいた九州俳句賞の祝賀会（熊本）の席にいました。

先生と北山ダムでお逢いして、すっかり俳句の魔力にとりつかれ三十年余り過ぎてしまいました。

「俳句の中に人間の生きること、生活の真実を地盤とした俳句を求め、物の真実をぎくりとする力で掴みとめて欲しい」といつも言われていたことを痛切な悲しみの中で思い出しています。

祝賀会の席上でいただいた、寄せ書きの中に、先生の言葉を短く的確に表現されている「土臭く、人間臭く」に出逢い、これから乾いた抒情で「土」や「人」を描くことが出来ればと思っています。

（「九州俳句」より転載）